

原 著

光干渉断層計を用いた糖尿病黄斑浮腫に対する 柴苓湯の有用性の評価

佐田 敏朗¹⁾, 鈴木 高佳¹⁾, 山崎 健一朗¹⁾, 水木 信久²⁾

¹⁾ 国際親善総合病院 眼科

²⁾ 横浜市立大学大学院医学研究科 視覚器病態学

要 旨: 目的: 近年, 光干渉断層計 (optical coherence tomography: 以下 OCT) が普及し, 治療効果判定に活用されている. 糖尿病黄斑浮腫に対する柴苓湯 (カネボウ柴苓湯エキス細粒[®]) の治療効果を, OCT を用いた中心窩網膜厚, 傍中心窩網膜厚, 黄斑体積の測定により検討した.

対象と方法: 2007年1月から5月までに当院眼科を受診した患者で, 糖尿病黄斑浮腫と診断され, 柴苓湯エキス細粒[®] (EK-114以下柴苓湯) の内服に同意した5例10眼 (58~70歳, 平均63.2±4.5歳) である. 柴苓湯8.1g/日を1日3回, 食前または食間に8週間以上継続投与した. OCT (OCT3000TM, Carl Zeiss 社製) の Fast Macular Thickness Map モードを用い投与前と投与後8週の中心窩網膜厚, 傍中心窩網膜厚, 黄斑体積を計測した. 統計学検討には t-検定を用いた.

結果: 中心窩網膜厚の平均値は投与前311±154μm, 投与後8週268±100μm, 傍中心窩網膜厚は投与前317±132μm, 投与後8週287±85μm, 黄斑体積は投与前7.45±0.98mm³, 投与後8週7.24±0.94mm³であった. 投与前と比較し投与後8週では中心窩網膜厚 (p=0.0469), 黄斑体積 (p=0.038) は有意に減少していた. 傍中心窩網膜厚 (p=0.1056) では有意差はなかった.

考察: OCT を用いた検討により, 糖尿病黄斑浮腫に対して柴苓湯の投与が有効である可能性が示唆された.

Key words: 柴苓湯 (saireitoh), 光干渉断層計 (OCT), 糖尿病黄斑浮腫 (Diabetic macula edema)